

地域に貢献する100年企業を目指して

株式会社大和製砥所 奈良県香芝市

株式会社大和製砥所は、工業用砥石を中心に製造し、国内はもとより海外にも販路を持つ。

昭和13年の創業以来、砥石の専門メーカーとして確かな技術を培い、時代のニーズに合った製品を提供することで、業界から高く評価されている。

今年で創業87年を迎え、「時代と共に進化し日本のモノづくりに貢献する」というビジョンを掲げるとともに、奈良の地に根差し地域に尽力することを使命としている。

刃物や工具を研ぐ油砥石や高精度な金型の最終磨きに使用されるダイヤモンドペーストといった工業用から、しつこい汚れ落しのシューズ磨きや包丁研ぎといった家庭用まで幅広く取り扱っており、長年、同社の製品を使っている愛用者は多い。

会社概要



会社名：株式会社大和製砥所
所在地：奈良県香芝市畑5丁目1613番地
電話：0745-77-2955
FAX：0745-78-0667
創業：1938（昭和13）年4月
設立：1944（昭和19）年6月
代表者：代表取締役 布施 俊二
資本金：2,000万円
従業員：60名
事業内容：各種砥石の製造・販売
URL：<https://www.yamatoseido.co.jp>



本社社屋

モノづくりを支える砥石

砥石と言えば身近な包丁を研ぐ家庭用砥石を思い浮かべる方が多いが、砥石の原材料、ましてや製造方法まで知っている方は極めて少ない。

砥石は、天然砥石と人造砥石に大別されるが、同社が製造する砥石は人造砥石である。

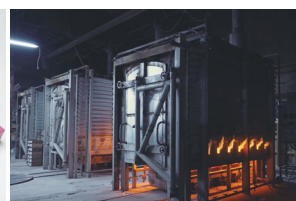
人造砥石は基本的に三つの要素で構成され、①金属を研磨するのに必要な研磨剤（炭化ケイ素・酸化アルミニウム・ダイヤモンドといった鉱物等）である「砥粒（とりゅう）」、②砥粒同士を結合・保持する「結合剤」、③砥粒と結合剤の間の隙間に研いだ切りくずを一時的に溜めて排出する役割を果たす「気孔」の組み合わせによってできおり、砥粒および結合剤に性能向上や気孔を作るための充填剤を混ぜ合わせ、成型プレスし窯で焼き上げている。

人造砥石のうち工業用砥石は、鉄鋼、造船、建設、自動車、ベアリング、電気、機械等の基幹産業の広い分野に使用され、“モノづくり”には欠かせない製品である。大手メーカーが研削加工に用いる丸い砥石をメインとするのに対し、同社は手作業で研磨する四角い砥石を得意とする。高度経済成長期に工業用製品の製造技術が高まるとともに、その製造機械や技術に適合した砥石が求められるようになり、同社は、技術力をもとに少量多品種の対応ができることから、全国的に認知度が高まり、業容を拡大していった。

砥石づくりには、料理同様、焼き上げるコツと



『油砥石』



砥石を焼き上げる窯

焼き上げ前の原材料の配分“レシピ”が重要な鍵となる。焼き上げ時間や方法に加え、“レシピ”次第で“味”は大きく変わる。先人達が相当な手間や時間をかけ、何度も実験を繰り返し作りあげた“レシピ”を大切に守り受け継いでいることが、同社の大きな財産になっている。一方、ナノレベルの微細な加工が要求されるハイテク産業の発展に伴い、より高精度で優れた砥石が求められる近年、同社は、あらゆる素材や製品に対応できるよう、日々、研究開発に余念が無い。

BtoBからBtoCへ

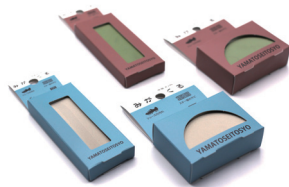
同社の製品は工業用のいわゆる“BtoB”の商品のみだったが、多角化を図るため“BtoC”の商品開発に乗り出している。数年前、社内で賞を設けアイデアを募集したところ、クラリネットやサクスの演奏を趣味に持つ女性社員から、「楽器に取り付けるリード（マウスピースとして装着する薄くて小さな板）を砥石で研磨できないか」という声が上がリ、『**らふらっ砥**』が誕生した。

また、小学生の子供を持つ男性社員からは「上履きや野球スパイクにこびりついてる汚れを砥石で落とせないか」というアイデアが浮かび、『**みがくる**』を開発した。“刃物研ぎ師”から同社へ転職した異色の経歴を持つ社員は、素人からプロまで使える包丁研ぎ『**鉄の花**』を生み出した。

ユニークな地場産品として、『**らふらっ砥**』と『**鉄の花**』は、同社が拠点とする香芝市のふるさと納税返礼品に選定されている。



『らふらっ砥』



『みがくる』

リーマンショックの爪痕

同社の中核をなす製造部には、係長は在籍する

が、部長や課長はいない。リーマンショック時に売上が3割まで急減、すぐに業績は立て直したものの、しばらく新規採用を停止したため、同社を牽引する40代の社員が極端に少なくなった。

会社のリーダーとなる世代が欠けるなか、布施社長は、2016年の社長就任早々、自身の考えや思いを社員に伝えるため、未来のモノづくりに貢献することを第一に考え、経営理念を「明日を創る人々と共に生きる」として発表した。

また、製造部門の人材育成のため、今までに無かった安全衛生にかかる勉強会を立上げ、その重要性を改めて説いたほか、“やる気スイッチ”を入れる目的で、お客様の喜ぶ姿を伝えるため、営業社員より毎月、“営業部通信”を発信している。どうす



営業部通信

れば組織が活性化し永続的に活動できるか、いかに社員のモチベーションや連帯感を高め、社員から自社は良い会社と思ってもらえるか、今も常に考え、心血を注ぐ。「今では、社内が丸とならないと開催できない製品展示会を毎年、全国で実施できるようになったことが何よりも嬉しい」と布施社長は笑みを浮かべる。



製品展示会

小さくても強い会社でありたい

同社は、製品の認知度向上と地域社会に貢献するため、プロバスケットボールチーム“バンビシャス奈良”の“パートナー”として協賛するほか、SDGsへの取り組みとして、地元の小中学校にバスケットボールを寄贈している。「今年で創業87年を迎えるが、今後も地域に寄り添いながら100年企業を目指していく。そのためには、大きな会社は目指さず、小さくても強い会社でありたい」と熱く語る布施社長の目は、砥石で磨かれた金属のように光り輝いていた。（岡村俊幸）